

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 現代心理学 研究科 心理学 専攻		
指導教員	所属・職名		氏名
	文学部・教授		大野 久 印
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	人格特性的自己効力感と領域固有の自己効力感との因果関係および変化についての検討		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	現代心理学研究科・心理学専攻・5年		三好 昭子 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
研究期間	2008 年度		
研究経費	200 千円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では福祉教育専門学校生を対象として、介護に関する自己効力感と人格特性的自己効力感(GSE)が、初めての介護実習を経験することによってどのように変化するか、そして介護に関する自己効力感と GSE との因果関係について検討する。平常通りの生活を送る中では、領域固有の自己効力感も GSE も変化せず、GSE が領域固有の自己効力感に与える影響の方が領域固有の自己効力感が GSE に与える影響よりも強かった。しかし、介護福祉士になるための専門学校生にとって、自我関与的な経験である介護実習での成功経験・失敗経験は、介護に関する自己効力感に大きく影響し、GSE にも強い影響を与える可能性がある。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 人格特性的自己効力感 ] [ 介護に関する自己効力感 ] [ 変化 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**質問紙調査**

本調査では介護福祉士を目指す専門学校生を対象として、介護に関する自己効力感と人格特性的自己効力感(以下、GSEと表記)が、初めての介護実習を経験することによってどのように変化するのか、そして介護に関する自己効力感とGSEとの因果関係について検討した。

**調査対象者**：1回目の調査は介護福祉士を目指す専門学校生 55名、2回目が 54名、3回目が 52名。

**分析対象者**：1回目から3回目までのすべての調査にご協力くださった 49名(男性 11名/女性 38名)、平均年齢 18.88歳( $SD=4.48$ )。

**手続き**：1回目の調査は 2008年 10月 6日、2回目は 2008年 11月 10日、3回目は 2009年 2月 2日、講義時間内に質問紙を配布し、その場で集団実施した。なお介護実習は 10月 18日～11月 2日までの 2週間だった。

**質問紙**：(a)介護に関する自己効力感尺度。介護実習で求められる技術について、大学教員 1名、福祉教育専門学校の教員 2名と協議し 7項目(身体介助、食事介助、心理的な支援、利用者とのコミュニケーション、介護者同士のコミュニケーション、的確な記録・記述、高い倫理性の保持)を選定した。「よくできる 5」から「できない 1」までの 5件法で回答を求めた。なお  $\alpha=.75$  (1回目)、 $\alpha=.69$  (2回目)、 $\alpha=.74$  (3回目) (b)主観的な感覚に焦点を当てた 6項目からなる GSE 尺度(三好, 2003)。Bandura(1977)、坂野・東條(1986, 1993)の定義に従って項目が用意されており、信頼性・妥当性ともに十分に高いことが確認されている。「非常に当てはまる 5」から「全く当てはまらない 1」までの 5件法で回答を求めた。 $\alpha=.83$  (1回目)、 $\alpha=.79$  (2回目)、 $\alpha=.83$  (3回目)

**【結果】****介護に関する自己効力感と GSE の変化**

介護に関する自己効力感尺度の合計得点の平均値は、1回目が  $M=21.1(SD=4.2)$ 、介護実習後である 2回目が  $M=23.7(SD=3.4)$ 、3ヶ月後である 3回目が  $M=22.5(SD=3.9)$ であり、1要因の分散分析を行った。その結果、主効果は  $F(2, 96)=15.0$  であり、0.01%水準で有意だった。平均値間の差の検定(Bonferroniの方法)を行った結果、すべての時点において平均値の差は 5%水準で有意だった。つまり 1回目よりも、介護実習後である 2回目調査における介護に関する自己効力感の平均値が有意に高く、実習の 3ヶ月後である 3回目は 2回目よりも有意に平均値が低かったが、1回目よりは有意に高かった。

GSE 尺度の合計得点の平均値は、1回目が  $M=17.6(SD=5.0)$ 、介護実習後である 2回目が  $M=17.5(SD=4.6)$ 、3ヶ月後である 3回目が  $M=16.9(SD=5.1)$ であり、1要因の分散分析を行った。その結果、主効果は  $F(1.8, 84.9)=1.27$  であり、5%水準で有意ではなかった。つまり GSE は 1回目から 3回目調査まで、安定しており、平均値に有意な変化が認められなかった。

**介護に関する自己効力感と GSE の因果関係**

本研究では介護に関する自己効力感と GSE の因果関係について検討するために、AMOS4 を用いてシンクロナウス・イフェクツ・モデル(Synchronous Effects Model)によって検討した。シンクロナウス・イフェクツ・モデルとは、同一時点における 2要因の双方向の効果を検討するためのモデルであり、縦断データから得られる情報によって 2要因の双方向の効果を同時に推定することができるという

## 研究成果の概要 つづき

因果関係を分析する統計的手法である(Finkel, 1995)。

## 適合度

① 介護に関する自己効力感と GSE のシンクロナウス・イフェクツ・モデル (1 回目から 2 回目):  $\chi^2(1, N = 47) = .22, ns, GFI = 1.00, AGFI = .98, CFI = 1.00, RMSEA = .00.$

② (1 回目から 3 回目):  $\chi^2(1, N = 47) = .02, ns, GFI = 1.00, AGFI = 1.00, CFI = 1.00, RMSEA = .00.$

③ (2 回目から 3 回目):  $\chi^2(1, N = 49) = 3.01, ns, GFI = .97, AGFI = .71, CFI = .98, RMSEA = .21.$

したがって適合度指標の値が十分である① (1 回目から 2 回目) と② (1 回目から 3 回目) における介護に関する自己効力感と GSE のシンクロナウス・イフェクツ・モデルの結果を検討した。

## パス係数

① 1 回目の調査時点での介護に関する自己効力感と GSE との相関係数は  $r=.39(p<.05)$  だった。そして 1 回目の調査の「介護に関する自己効力感」が 2 回目の調査の「介護に関する自己効力感」を  $\beta=.56(p<.001)$  で予測していた。「GSE」も 1 回目が 2 回目を  $\beta=.80(p<.001)$  という強さで予測しており、「GSE」の方が「介護に関する自己効力感」よりも安定していることが示された。また 2 回目の「介護に関する自己効力感」と「GSE」との双方向の因果関係については、「GSE」が「介護に関する自己効力感」に有意な正の効果を示し ( $\beta=.35, p<.01$ ), 「介護に関する自己効力感」から「GSE」への影響は認められなかった ( $\beta=-.18, ns.$ )。

② 同様に, 1 回目の調査の「介護に関する自己効力感」が 3 回目の調査の「介護に関する自己効力感」を  $\beta=.52(p<.001)$  で予測していた。「GSE」も 1 回目が 3 回目を  $\beta=.75(p<.001)$  という強さで予測しており、「GSE」の方が「介護に関する自己効力感」よりも安定していることが示された。また 3 回目の「介護に関する自己効力感」と「GSE」との双方向の因果関係については、「GSE」が「介護に関する自己効力感」に有意な正の効果を示し ( $\beta=.36, p<.01$ ), 「介護に関する自己効力感」から「GSE」への影響は認められなかった ( $\beta=-.09, ns.$ )。

## まとめ

- ▶ 介護に関する自己効力感と GSE について, 介護実習の前後とその 3 ヶ月後の平均値について分散分析 → 介護実習により介護に関する自己効力感は有意に上昇したが, 3 ヶ月後には有意に低下 (1 回目の調査の平均値よりは高いが)。一方 GSE は, 介護に関する自己効力感の変動にもかかわらず変化しない。
- ▶ 介護に関する自己効力感と GSE のシンクロナウス・イフェクツ・モデルの検討 → 1 回目の介護に関する自己効力感が 2 回目 (3 回目) を予測するよりも, 1 回目の GSE が 2 回目 (3 回目) を予測する方が強いことから, GSE の方が介護に関する自己効力感よりも安定している。
- ▶ また介護に関する自己効力感が GSE に与える影響はなく, GSE が介護に関する自己効力感を規定している。

つまり介護福祉士を目指す学生にとって, 介護実習は一時的に介護に関する自己効力感を高めたが, 自我関与の高い領域における自己効力感の上昇によってさえも GSE は変化せず, 安定しており, GSE が介護に関する自己効力感を規定していることが示された。また介護実習の 3 ヶ月後における 3 回目の調査により, 介護実習によって一時的に上昇した介護に関する自己効力感が, 時間の経過とともにもとの水準に戻ってしまう可能性が示唆された。

※ この (様式 2) に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。